

正願寺の梵鐘 (平和の鐘)

カーターセンターの玄関に日本のお寺の梵鐘が置かれています。センター博物館での展示ではないので一般の訪問者の目に触れることもなく、今ではこの梵鐘の数奇な運命を知る人も少ないようです。

この梵鐘は、1986年にカーターセンターが設立された際、当時の日本人商工会議所と在アトランタ日本国総領事館によって寄贈されたものだそうです。この梵鐘が寄贈された際には、何故この梵鐘が米国にあるのか詳しい経緯は分かりませんでした。

梵鐘が寄贈されて後、当時の日本の国会議員がカーターセンターを訪問した際に、議員は、梵鐘に「備後州小童村円通山正願寺」と刻まれていることを確認し、梵鐘が広島県三次市甲奴町小童の円通山正願寺（しょうがんじ）のものであったことを突き止めました。議員は、自ら正願寺を訪問し、梵鐘が米国のカーターセンターに保管されていることを報告されました。

正願寺の記録によれば、この梵鐘は江戸時代の文政3（1820）年に鑄造されました。当時の住職は、「この鐘を打てば、一に、仏が来臨する。二に、罪苦を滅す。三に、諸魔を退散させる。」と呼びかけて、この梵鐘を鑄造したとのこと。この梵鐘は、村人に親しまれ、時報として、仏事の合図として、更には緊急時の早鐘として、村人の生活を支えました。

時は昭和の時代となり、日本は戦争に突入していきました。戦争は長期化し、元来資源に乏しい日本は兵器や弾丸を作成する金属類の不足に悩み、昭和16（1941）年、金属類回収令を公布しました。様々な金属類、家庭用品、美術品ともいべき刀剣類、更には結婚指輪なども供出されたとのこと。お寺の梵鐘も例外ではありませんでした。正願寺の梵鐘も昭和17年に砲弾の資材として呉海軍工廠に供出されました。

兵器として溶かされる運命にあった梵鐘は、何故か溶かされることなく、英国に渡りました。あの時代、兵器の材料として供出された多くの貴金属や刀剣類が溶かされることなく、行方知れずになったという話がありますから、この梵鐘もそうしたものの一つであったのでしょう。

英国に渡った経緯は終に判明しませんでした。梵鐘は英国人のテーラー氏のもとに一旦は落ち着きます。その後、1982年にテーラー氏の子どもミロス・テーラー氏が梵鐘と共に米国のフロリダに移住します。その3年後、英国に戻る事となったテーラー氏は梵鐘を売りに出します。このことを知った当時のアトランタの日本人商工会議所と日本国総領事館が寄付を募集し、3千ドル、当時の日本円で約75万円を支払ってこの梵鐘を購入し、カーターセンターに寄贈したとのことです。

かつての梵鐘が米国のカーターセンターに「平和の鐘」として保管されていることを知った正願寺は、梵鐘を保管するカーターセンターが平和を追求する団体であることを歓迎し、ふさわしい場所での保管を了承しました。正願寺は、平成2（1990）年に二代目の梵鐘（友愛の鐘）を鑄造しました。同年10月には、要請に応えたカーター大統領夫妻が正願寺を訪問されました。

平成3年、甲奴町（現在の三次市）とジョージア州アメリカスは相互訪問を開始し、姉妹都市関係を構築します。三次市からの訪問は現在も毎年続けられており、今年も8月23日から26日に訪問が実施されます。平成6年、三次市は市民活動の拠点としてジミー・カーター・シビックセンターを建設します。カーターセンターは日本にも存在するのです。同年、カーター元大統領夫妻はセンターの落成式に参列するため、再度三次市を訪問しました。カーター元大統領夫妻から送られたピーナッツは今では三次市の土産物となっているそうです。

正願寺の梵鐘は長い旅を終え、一見、安住の場所を得たかのように見えますが、鐘の旅は未だ続いているのです。

当時のアトランタの在留邦人が梵鐘を寄贈した際、日本側では然るべく梵鐘が鐘撞台に設置され、その音をアトランタの街に響かせることを希望したのだそうです。梵鐘は大切に保管されていますが、その音を響かせる状況にはありません。平和の鐘は今、遠い日本で友愛の鐘の音が響き、キング牧師とカーター元大統領という二人のノーベル平和賞受賞者を輩出した平和の街アトランタに自らの音を響かせる日が来ることを願い、静かに歴史を引き継ぐ者が現れるのを待っているのです。

（本文作成には三次市関連の資料を参考にさせていただきました。）